

## 昭和医療技術専門学校のスローガン 「全員卒業・全員合格」2年連続達成の軌跡 ～本校卒業試験と国家試験の相関と分析～

香取 尚美\*<sup>§</sup> 檜山由香里\* 生江 麻代\*

谷口 智也\* 望月 泰男\* 山藤 賢\*

【要 旨】 本校ではスローガンとして「全員卒業・全員合格」を掲げている。この意味合いは、国家試験の合格率を高めることが目的ではなく、本校に入学した学生一人一人が幸せになってもらえるように、我々が学生と向き合うことが大切であるという考えに基づいている。平成24年度に続き、25年度も本校では、最高学年にて留年者を出すことなく、全員が国家試験を受験し、全員が合格した。全国平均は81.2%と近年では高い合格率となったが、我々は国家試験の難易度に左右されず、学生達を国家試験合格に結びつける教育をしていかなければならない。それには3年次の国家試験対策や学生評価の仕組みも必要ではあるが、常に全員での合格を目指すためには、それだけではなく、医療の現場でより必要とされる医療人となるべく、入学時より始まっている本校独自の3年間に及ぶ人間教育が重要であると考えている。

【キーワード】 昭和医療技術専門学校、第60回臨床検査技師国家試験、臨床検査技師教育、国家試験対策、全員卒業・全員合格

### 緒 言

昭和医療技術専門学校は臨床検査技師教育に特化した学年定員80名の3年制の専門学校である。本年度創立35年を迎え、これまで2,000人以上の卒業生を輩出してきた。本校の教育理念は、「人間性豊かな医療人の育成」であり、本校に入学してきた学生は、国家試験に合格することが最終的な目標ではなく、医療の現場に出てから、そこで必要とされる医療人になることを最終目標としている。近年、本校では、「本校の在り方」というものを大事にしている。その中で、スローガンの一つとして、「全員卒業・全員合格」という

ものを掲げ、これまでもその試みや教育内容を何度か日本臨床検査学教育学会学術大会にて発表してきた。平成25年度の卒業生たちも、幸い、平成24年度に引き続き2年連続で、最終学年において、一人の留年生も出さずに、全員で臨床検査技師国家試験(以下国家試験)を受験し、そして全員が合格することができた。そして、全員が無事に就職し、臨床検査技師としての道を歩んでいる。社会に出てからより輝ける臨床検査技師を育てるべく、我々が試みている学生自身の力を引き出すための教育課程、その経緯と取り組みについて報告し、平成25年度国家試験の傾向も踏まえ、今後求められていく教育について考察を加える。

\*昭和医療技術専門学校臨床検査技師科 <sup>§</sup> n-katori@showa.ac.jp

## I. 対象と方法

本校入学後、3年間の過程を経て卒業していく全学生達と、その教育内容の一部、また平成25年度国家試験の結果を報告対象とした。

本校では教育方針の一環として、入学者が、全員での卒業・国家試験合格を目指すということを大切な価値観にしている。個人の合格のみを目的としてはいない。それが「全員卒業・全員合格」というスローガンである。これは、医療人たるもの、決して個人主義に走るのではなく、人に手を差し伸べられる、人の心に寄り添える人物でなくてはならないという教育理念からきているものである。そして国家試験対策というと、3年次になってからの、座学や、特化した内容が取り上げられることが多いが、本校において大事にしていることは1~2年次から3年次の臨地実習を終えるまでの過程であり、その全てが国家試験の合格につながっていると考えている。それまでの教育の全てがあつてこそその国家試験対策である。そのことを職員のみならず、本校に在籍する全ての学生も教育方針として理解し、その方針に基づいて行動していくことが、大事である。学会発表時には、そのような学生の姿勢がどこで培われるのかという質問をフロアーからいただいた。1~3年次の取り組みの一部ではあるが、考え方も含めて次に紹介する。

本校では入学時より卒業にいたるまで、様々な経験から、医療人としての在り方を身に付ける教育を大事にしている。入学時よりの「あいさつ」と「掃除」はコミュニケーションの第一歩としても、3年間を通し、一番大切にしていることである。1年次には専門教科の他に、「日本語表現法」「人間学」「生命の倫理」といった講座を中心に、コミュニケーションの大切さや、自分自身の在り方を考える時間、命の尊さなどを学ぶ時間を多く設け、医療人としての在るべき姿を考え、未来の自分に真剣に目を向けることを大切にしている。2年次には、3年次の臨地実習や、卒後の現場で活躍できる臨床検査技師像を視野に入れ、知識の確立はもちろんのこと、学内で学べる技術

習得に力を入れている。ただ実習の時間をこなすだけでなく、その技術習得がきちんとなされているかを評価するため各実習では実習終了後に実技試験を取り入れている。臨地実習前にもOSCE(客観的臨床能力試験)を行い、各々の技術の確認を行っている。また、マナー研修を取り入れ、言葉遣いや姿勢、振る舞いを実践しながら学び、礼節あるマナーについて学ぶ機会も設けている。しかしその研修も決して形だけの振る舞いを重視しているのではなく、働く者としての心を学ぶような要素を重要視し、ディズニー研修なども行い、学生が興味を持って社会に触れることができるような工夫も取り入れている。また「医療人特論」という授業では、医療に限らず、様々な分野から多様性のある講師をお呼びし、社会に出るにあたり、人としての感性を磨く教育も行っている。3年次では半年間の臨地実習と臨地実習後の技術習得度確認のためのOSCE、卒業研究、国家試験対策を行っている。また、3年間を通し、学内での学業のみならず、学校を離れ、全員参加での研修などの機会も多い。1年次は国内での教育キャンプ、2年次には台湾に訪れ、他国の医療情勢や文化を学ぶ研修旅行も取り入れている。3年次の秋には、富士山での自然体験も交えた合宿も行っている。いつもと違う環境で、同じ目標を持つ仲間と過ごす時間は、新たな発見と成長、そして心の共振を感じる時間でもある。その他にも、毎年、学生が主体となって文化祭や球技大会を行っていたり、早朝の合同学外清掃など、学年を超えた縦のつながりも大切にしている。このようなイベントなどの、一つ一つの取り組みは、直接国家試験につながっているようには見えないかもしれないが、本校では、その取り組みの全てが大事な要素であると考え、実践している。

3年次の国家試験対策の段階になると、教員の役割はその方向性を自信を持って明確に学生に伝え、導くことになってくる。最終的に、国家試験を受けるのは、教員ではなく学生自身である。それゆえ、教員は学生たちを支えながら、その方向が正しいものかを見極め、学年全体と学生個人と向き合い、今何が一番大切なことかを選択しなけ

ればならない。その中でも本校が国家試験対策として最も大切にしていることは、学生同士の絆である。同じ志を持った学生同士が最終学年である3年次に進級した時点で、全員で合格することを学生自身が目標としている。その学生同士の絆が仲間を支え、国家試験合格への一番の近道へとなっていると感じている。

学会時に、いくつかいただいた質問の中に、本校の卒業試験の作成についての質問があったので、少し触れておく。本校の卒業判定をクリアするということは、「知識・技術・振る舞いにおいて臨床検査技師たる第1歩を踏み出すにふさわしい人物である」ということである。当然、クリアしなければならない試験の点数評価があり、全員を卒業させるために難易度を落としてやっているのではなく、またやみくもに厳しくしているのではなく、適切と思われるレベルを設定し、そのレベルに学生が到達するために努力するということが大切であると考えている。そのため、卒業試験の難易度の設定は、国家試験の難易度相当を目標としている。しかしそれは、簡単に決められるものではない。本校においては、一題一題精査して、本校各教員が作成をしている。その設定の基本は国家試験と同レベルの問題であるということ念頭に、各問題にMPI (Minimum Pass Index) の設定を行っている。そのことにより、問題を作成する教員自身も、感覚ではなく客観的に結果を判断することができ、自分の考えや学生の理解とのギャッ

プや伝え方など、自分自身の成長にも繋がると考えている。そして、そのような結果、毎年、卒業試験の成績や得点分布が国家試験にもほぼ反映されている。平成24年度の場合も卒業試験の結果は、国家試験においても、上位、下位と大きな変動はなかった。ただし、平成25年度においては、卒業試験において、最低得点者だった者の点数が予想以上に伸びた結果となり、逆に最高得点者は点数が下がった結果となったので、その国家試験の内容に関して、今回、検証し、考察してみた。

## II. 結果と考察

平成25年度は、3年次卒業試験において、全員が卒業要件を満たし、全員で国家試験に臨むことができた。国家試験においても100%の合格率であった。(総数・新卒共に合格率100%【厚生労働省発表資料】)一昨年も、同様に、3年次、留年生を出すことなく、国家試験に100%合格することができた。しかし、さらにその前年の第58回国家試験においては、一人不合格となり、合格率は97.8%であった。

過去10年間における全国国家試験合格率と本校国家試験合格率の推移を図に示す。本校の平均国家試験合格率は98.7%、全国平均は78.5%と上回る結果を得ている。また新卒合格率の平均と比較しても、良い結果を得ることができている。しかしながら、本校の掲げている「全員卒業・全員合格」は冒頭でも述べたように、この2年間では

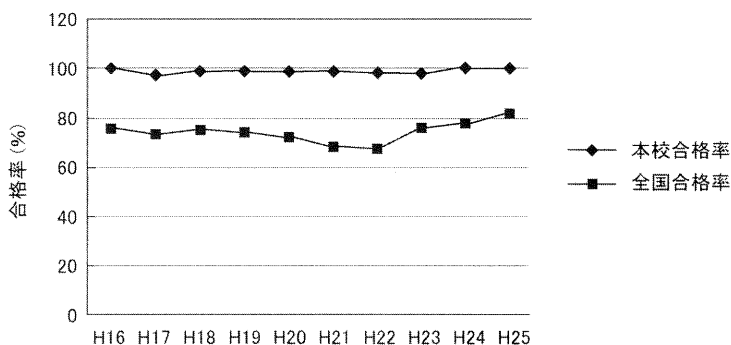


図 過去10年間における臨床検査技師国家試験合格率の推移

達成できているが、当然、3年次になってからも、留年する学生、国家試験に不合格になる学生は残念ながら存在する年もある。各校の合格率は、もちろんその年の国家試験の難易度にもよるであろう。しかし、我々の成すべきことはその年の国家試験の難易度に左右されず、全員を合格に導くことであると考えている。そこで、平成24・25年度の国家試験結果を分析することで、本校学生の力を客観的に評価し、今後の教育に役立てようと考えた。

まず平成24年度の結果だが、本校における最高得点が174点、最低得点が123点であり、平均正解率は73.6%であった。それに対し、平成25年度の国家試験結果においては最高得点が177点、最低得点が135点であり、平均正解率は77.1%であった(表1)。結果として、かなり点数はあがっているが、全国の合格率も77.2%から81.2%に上がっており、平成25年度の国家試験は、結果的にかなりやさしい問題であったと考えられる。しかし、感覚的な話にはなるが、本校の学生達は、国家試験終了後のインタビューでは、できなかったという声が、平成24年度よりも多かった。実際の点数と感覚的なそのギャップはなぜ生まれたのかということについて、両年度の本校国家

試験結果を比較してみた。本校における各年度での問題正解率を分析した結果を示す(表2)。全ての問題の正解率を出し、正解率80%以上のやさしい問題、40%以下の難しめの問題、20%以下の難問という設定を作り、それぞれの問題数をカウントした。正解率80%以上の問題に関しては、2年とも120題であり、正解率40%以下の問題については第60回が22題、59回が34題であった。この結果からも平成25年度の方が、結果としてやさしい問題であったと言える。では、本校の学生の感じた印象と、この結果とのギャップであるが、平成25年度の国家試験検討委員会でも、平成24年度と比べ、検討問題が増加していた。設問文が曖昧である部分や、複数回答になり得る問題が多くあったことから、学生自身が悩んだ傾向があると思われる。また、結果から見ると、正解率20%以下の難問は一昨年度と比べて昨年度では10題と半分である。これは、平成24年度では、解答分布から見ても、明らかに歯が立たないような問題が多く、それに比較し、平成25年度では、悩む問題が多かったことから、学生自身の印象としては、できる問題とできない問題がはっきりせず、結果として難しかったという印象が強く残ったのではないかと考えた。

表1 第59回および第60回国家試験結果の比較

国家試験	本学の成績				全国的成绩
	最高得点	最低得点	平均正解率	合格率	合格率
第59回 (H24)	174点 (87.0%)	123点 (61.5%)	73.6%	100%	77.2%
第60回 (H25)	177点 (88.5%)	135点 (67.5%)	77.1%	100%	81.2%

表2 本校における各年度の問題正解率(難易度)の推移

平均正解率	難易度	第60回(H25)	第59回(H24)
80%以上	やさしい問題	120題	120題
40%以下	難しめの問題	22題	34題
20%以下	難問	10題	20題

### III. 結 論

以上のことを踏まえつつ、国家試験に全員が合格するために考えなくてはならないことを検討した。ここ10年間の国家試験全国合格率を見たところ、平成22年度、第57回国家試験が最も低い67%であった。この時には、本校受験生は残念ながら一人不合格であった。その際の本校の平均正解率は74%、不合格であった学生の点数は自己採点で118点であった。難易度の高かった第57回国家試験を、昨年度の学生達が仮に受けたらとシミュレーションをするために、昨年度の本校模擬試験において、平均正解率が近い試験と比較してみた。国家試験直前の模擬試験がそれに相当し、その際の最低得点者が118点であった。この結果から、第57回の国家試験を昨年度の学生が受験した場合、成績下位者はやはり不合格の可能性はある。これはもちろん、あくまでも想定の話ではあるが、昨年度国家試験がもしここ10年で一番難しい問題と同レベルであったとしたら、全員合格をしていなかった可能性も高いということである。私達は、自省の念も含めて、どのようなレベルの国家試験が出て、今後も全ての学生が合格できるように、指導する必要性を感じた。

これまで、国家試験の考察、本校の取り組みについて述べてきたが、我々教職員の使命は、数ある学校の中から、本校を選び入学してきた学生たちに対して、その学生たちが幸せになってもらえるよう、教育を通して、関わっていくことである。その学生たちに本校に入学してよかったと心から思ってもらえるよう、真摯に向き合っていくことが私たちのできることである。この3年間の関わりの中で、各学年に役割があり、「あいさつ」から始まるコミュニケーション能力の向上や臨床検査技師として欠かすことのできない、知識・技術の向上は当然のこと、一見、直接国家資格取得には結びつきのないような取り組みの、その積み重ねが、実は学生一人一人の経験となって、ここぞという場面で本領を発揮できるのではないかと考

えている。国家試験合格率だけを上げようと考えれば、その対策に費やす時間を増やすことが一番効率が良いと考えるかもしれない。しかし、本質的に考えて、そればかりが効果的な近道と本当と言えるのかは疑問であると思っている。実際、本校では3年次の臨地実習を6ヵ月間行っており、その分、他校と比べて、国家試験対策の時間は短くなっているのかもしれないが、その中でも高い国家試験合格率に結びついている。国家試験対策といっても、最終学年になってからの座学や過去問対策だけでなく、それまでの学校生活で培ってきたすべてが国家試験対策となっているのである。ただ暗記をしていても、言葉の言い換えや応用にまどわされては、本当の意味での対策にはなっていない。入学当初からの、原理原則を理解した徹底した基礎力の向上と、論理的な発想力を持ち、どのような問題が出ても動揺することなく、自分の力を発揮することができるメンタルの強さも大事である。どのような環境に置かれても、何事にも打ち勝てる心の強さや、仲間を大切にできる心の優しさを持った学生たちは、最終的に個人で戦える強さを、そして集団で助け合う術を、この学生生活の中で身に付けている。だからこそ、自信を持って卒業し、国家試験に向き合った学生たちは、最後に自分の本当の実力を精一杯発揮できているのではないだろうか。それが、今までの本校の国家試験の結果であると思っている。今後も本校に入学した学生たちが、最後に笑顔で卒業してもらえるよう、そして就職後も自己研鑽に励み、現場から必要とされる良き医療人となれるよう、真の人間教育・医療人育成につとめ、全員卒業・全員合格を目指していきたい。

#### 【謝辞】

第9回日本臨床検査学教育学会学術大会での演題発表時に座長を務めてくださいました松尾収二先生、またいつも共に歩んでくれている本校教職員並びに学生達に感謝の意を表し、稿を終えることといたします。